
天然の鈍感は可愛い

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然の鈍感は可愛い

【Nコード】

N4334F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

天然な少年のことが好きな三人の愛は届くだろうか？。男の子も出ますが恋愛では無いから、微BLですね。後の二人は女の子です。オチ無しです。

「ナオ君〜!!」

初めまして、河村^{かわむら}直^{すなお}です。

皆から（約一名以外）は、ナオって呼びます。
今、僕の名前を呼んだのは友人のセツナ君。

「ナオちゃん!!」

この子は、女友達のサクラちゃん。

「・・・直」

この子が例外の女友達のマナちゃん。
とりあえず僕の友人達です。

セツナ君の性格は、犬みたいだけどガタイが良い。で、僕に毎回
抱き付いてくる一人。

サクラちゃんは、甘えんぼな子犬みたい。で、僕に毎回抱き付い
てくる第二号。

マナちゃんは、一番大人で猫みたい。セツナ君はツンデレと言っ
てるけど分らない。

「セツナ君どうしたの？」

「デート行こうよ」

「逝って来い」

抱き付きながら言うセツナ君。 マナちゃんも相変わらず冷たい反応だね。

「ナオちゃん私と行こうよ!!」

「お前だけ炒って来い」

炒ったらダメじゃないかな？

「・・・直はどうしたいの？」

「僕？うゝん。公園でのんびりしたいなあ」

あまり出掛けると二人が、周りに迷惑かけるし。

「マナちゃんは、それで良い？」

「・・・私は本読むから」

良いなあ。僕も持つて来れば良かったなあ。

そして、皆で公園に向かった。その時も、二人は僕に抱き付いてる。ちよっぴり迷惑かな。

芝生に座るみんな。

「これ読む？」

マナちゃんが、本を貸してくれた。

「つまんない」

「ナオちゃん膝枕!!」

セツナ君の言葉に続けと、サクラちゃんが膝枕を強要してきた。

「僕なんかじゃダメだよ」

「柔らかくて良いじゃん!!」

僕の抗議も無駄だった。マナちゃん・・・お願いだから助けてよ。本読んで無いで。

「・・・あまりしつこいと嫌われるよ？」

マナちゃんの発言に石になった二人。

その方が嬉しいけど、ってマナちゃんの小声が聞こえたけど意味が分からなかった。

「好かれてるね。直」

「えゝモテないよ。僕」

だって、今までモテたことなんて無かったし。

「（鈍感なんだから。まあそこが可愛いんだけど）」

「（可愛いなあゝやっぱり俺の嫁にしたいぜ）」

「（やっぱり私は好きだよ！！）」

マナにセツナにサクラは、それぞれ直が好きなのです。でも、鈍感な直のせいで、苦労人な三人。

自分は、三人以外に嫌われていると思っている直です。

「どうしたの？三人共？」

「うえ？」

「何でも無いわ」

吃ったセツナを無視して答えたマナ。

みんなは、首を傾げる直を見て可愛いなあ、と思ってる。
正確には、マナ以外萌えてます。

「マナちゃんってツンデレ？」

「はあ？」

急に言われた発言に真っ赤になったマナ。

「セツナ君が言ってたの」

「セーソーナーー!!」

マナは、赤い顔のまま本の“角”で殴った。しかも容赦無く。

「うわぁデレじゃなくて怒ってるよ」

サクラは、この場に不釣り合いな発言をしてる。

「ハアハア・・・ツンデレって・・・」

動揺してるマナ。両手で顔を押さえてる。しかも、直はクールじゃないけど可愛い、と思っただらしい。

「ねえ・・・ナオちゃん」

「な・・・なに!？」

急に抱き付かれて顔を赤らめる直。胸が・・・と小さい声がしたが、運が良いのか悪いのか、誰も聞いて無い。

「なあゝナオ君さ、俺のこと好き？」

場違いな発言をしたのは、復活したセツナ。
一瞬止まって、ハツとした。

「う、うん・・・」

直の曖昧な返事に、興奮したセツナ。

「・・・」

マナの場合は、二人みたく積極的になれないから、黙るしか無い。

「どうしたの？マナちゃん」

何でも無いよ、と笑顔で言ったが陰りがある顔だった。

「顔色が悪いよ？」

顔を覗かれてるから、直の上目遣いに動揺してるマナ。

「あ、いや・・・これあげるー！」

直に投げ渡したのは、キャンディーだった。一種の照れ隠しです。
サクラは、ツンデレ来たあ、と思ったみたいだ。

「何すんだあー？」

「ナオちゃんって好きな人いないの？」

セツナを無視したサクラは言った。他の人も気になったらしく、耳をダンボにしてる。

「え・・・好きな人？・・・ん。いるよ」

一時停止した。分りやすく。
顔が引きつってるみんな。呪ってやる、と物騒なことを考えてる。

「三人共好きだよ？」

典型的に、ズゴーっと転んだ。
マナは、やっぱりか、と分ってたらしい。

「あれ？僕、変なこと言った？」

三人は、更に直が好きになったのは言うまでも無い。
ライバルが増えたら、三人は力を合わせて、倒すだろう。
直にバレないように・・・。

（後書き）

ホントは、マナ彙編にしたかったけど、他の二人も好きだから止めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334f/>

天然の鈍感は可愛い

2010年10月31日01時38分発行